

は 400 人近くの研究発表があるのですから大ごとです。これらはすべてダブルツリーヒルトンホテルの中の会場で行われました。このほかに 23 本のポスターセッション発表もありました。

これらの発表のすべてはもちろん聞くことができておりませんが、毎回のことながら、研究の「方法論」や政策概念をめぐる議論が目立つほか、ファミリービジネス、ジェンダーと女性企業家、エスニック/マイノリティビジネス、持続可能性と中小企業、イノベーションと中小企業などをめぐる研究成果の発表が特徴的でした。特に私の記憶に残るのは、「起業家教育」をめぐる議論がさまざまな経験から語られていたこと、「ecosystem」「cultural capital」などの近年の造語が広く用いられたこと、また「venture」「new venture creation」といった語が定着していることなどでしょうか。アイルランドの経済発展と中小企業に関する研究成果を聞けなかったのは心残りでした。そうした発表も予定されていたのですが。

日本からは、JICSB 会員である岡室博之氏（一橋大学）、加藤敦氏（同志社女子大学）、山本聡氏（東京経済大学）、丹下英明氏（日本政策金融公庫総合研究所）がそれぞれ分科会での研究発表を行い、久保田典男氏（島根県立大学）がポスター発表を行いました。岡室氏は二本の発表です。

このほか、田路則子氏（法政大学）、播磨亜希氏（ブレーメン大学中小企業・企業家研究所）も研究発表をされ、さらに堀潔氏（桜美林大学）や私なども加えるとのべ 12 名と、日本関係の参加者も賑やかになりました。

今回の大会では、会場で資料やプログラムのたぐいは一切配付されず、すべて電子情報化・web 提供になっていたことに加え、分科会でも ppt などを用いずに「TED スタイルで」発表と討論を行うことが奨励され、また分科会座長も一切置かれなかったことが特徴的です（大会後半にはさすがに、全発表を掲載したプログラム一覧表のコピーが受付に用意されていましたが）。しかしこれらは功罪半ばであると思います。ppt などによる重要な情報の投影もなく、配布物もないままに、実証的な研究内容が語られても、非常に理解をしにくく、言葉の問題もあって、よくわからないままに終わる恐れがあります。TED スタイルで「メリハリ」効かせた、論理や概念や意見主張などに関し、対話的方法で理解を図っていくなどというのは、やはりこうした場にはなじまないところが多すぎましょ。座長がいなくても、全体の進行や時間調整、論点の交通整理などがないままに、発表者たちがちょっと戸惑いながら自分ですすめるかたちになってしまいますし、各分科会ごと発表者ごとの時間をそろえ、あちこち聞きに行く人の便に寄与するようにはなっていません。

こんどの ICSB では重要な決定がいくつかありました。一つは、来年の第 60 回記念大会が予定されていた中国青島ではなく、アラブ首長国連邦のドバイに変更されたこと、それに伴いさまざまな変更が生じたことでしょう。UAEU 大学が中心となり、来年 6 月の前半に開催予定としか発表されていません。2 年前に決まっていた青島開催ができなくなったことにはいろいろ危惧もされるのですが、諸般の事情がからんでいるようです。ドバイには ICSB 組織さえまだないものの、取り急ぎ準支部（chapter）が設立されるようです。なお、2016 年 6 月の ICSB 第 61 回大会は米国ニューヨークで開催されることが、すでにアナウンスされています。

マレーシアの ICSMEE が新たな ICSB 支部として承認されました。これは後で記すように、アジア組織にとっても重要な進展です。

6月11日には ACSB アジア協議会の理事会がトリニティカレッジ内で開催され、メンバーである JICSB から委員長の新井と、副委員長の加藤氏が参加をしました。そこでは既定の本年度 ACSB 大会のソウル開催（2014年10月27～31日）の確認、ACSB 副会長に岡室博之、高橋徳行両氏が就任していることを含めた人事運営体制の確認、参加組織の拡大に伴う人事と担当の再調整実施のほかに、来年には ICSMEE の主催により、2015年10月26～30日にマレーシアサラワク州ミリ市で ACSB 大会を開催するという案が協議され、承認されました。サラワク州(ボルネオ島)での開催には旅程の問題などがありますが、マレーシア政府、サラワク州などが熱心に動いており、会場も立派なもので、盛大で実りあるものとなることが期待されています。このほか、ICSB メンバーになったマレーシア ICSMEE の ACSB 参加に加え、オーストラリア・ニュージーランドの組織である SEAANZ の参加も要請され、応諾を得ました。次回理事会は10月のソウル ACSB の際に開かれます。

14日朝にはさらに、SEAANZ のティム・マツアロール氏（西オーストラリア大学）の要請で、ACSB の今後の活動に関する意見交換と懇談の場が設けられ、キム会長からいくつかの提案がありました。今秋の ACSB2014 を機に、ACSB としての情報交換や共同研究、事業化などの展望が示され、議論が深められました。SEAANZ や韓国は共同研究の展開につよい意欲を示しています。今後 JICSB としても、どのようなかたちで関わり、具体的に取り組んでいくのか、ヒトカネの問題を含めて検討が必要です。また ACSB2014 では青年企業家のフォーラムを持ちたいという、キム会長からの提案がありました。

13日夜には市長公邸であるマンションハウスにて恒例のガラディナーパーティが開かれ、多数の参加者で大変に賑わいました。チャールズビラズ元会長はじめ、ICSB の功労者への表彰、今大会の優秀発表の表彰などが行われ、あとは賑やかなケルト音楽の演奏でのダンスパーティになだれ込んでいました。

翌日もまだ各分科会発表も続くのですから、大変であり、体力も必要です。

14日、お疲れの中でも各分科会は続行、熱心な議論が行われていました。特に、「起業家教育」に関しては、「やろう」という話の段階ではなく、多くの実践経験や試行錯誤、さまざまな調査や議論を踏まえて、あり方自体を見直し評価していくという研究が目立ったのが特徴的でした。

昼からは閉会全体会で、インドの女性企業家マディ・シャルマ氏の「ゼロからのスタート」に伴う経験にもとづく強烈な講演があり、その後 ICSB 新会長に就任したルーベン・アスクア氏（アルゼンチン）のスピーチ、次期開催地ドバイの UAEU 大学モハメッド・アルバイリ氏からの紹介、開催案内と、「異例ながら」契約サインの儀式が行われました。

問題の2015年ドバイ ICSB 大会については、のちに理事会で日程調整が行われ、2015年6月6日から9日と定められました。この理事会は、14日午後4時にわたって開かれ、アスクア会長、タラビシ

一専務理事、アルプス前会長、キム次期会長はじめ、各国の組織代表が参加しました。今年度からの組織改革実施で理事の数が減らされ、日本は理事ではないのですが、「投票権を持つ」理事とそれ以外というかたちで、柔軟な出席の扱いです。ですから三井と岡室副委員長も参加しました。今年のプエルトリコ大会の際の理事会には、日本支部を代表して加藤副委員長が参加しています。

理事会での大きな論点となったのは、ひとつには各国支部の状況であり、カナダの支部が会員減に悩んでいる一方、広い国土もあって活動がしにくいことが述べられ、「地域」組織に改編ができないかという意見が出ました。ECSB 欧州協議会（支部）のように各国を越えた単位です。欧州の場合各国ごとの支部組織はなく、支部組織を集めた ACSB とは異なり、ECSB 会員としての参加です。これに似たような組織を米大陸にも作ろうというのですが、その区分をどうするか等でいろいろな意見が出て、持ち越しとなりました。ドバイのことも含め、中東協議会という線も示されました。

いまひとつは ICSB への会費未納がおこっている支部の問題で、出席がなかったブラジル、ロシア、昨年度世界大会開催時の支部登録会員数で理解の食い違いがあるプエルトリコといったところの件で、連絡ないところには会員権停止を含めて今後の未納請求と協議が確認されました。

一方では新しい組織としてのメキシコ代表からの加盟申請が出され、組織の状況や展望が紹介されましたが、理事会の議論としては、この組織自体が作られたばかりであること、その国を代表するものと確認できるか等の意見もあり、結論として「条件付き支部承認」のようなかたちになりました。一定期間活動状況を見て、正式承認となるものです。メキシコに支部ができると、うへの米大陸の組織改編にもからんできます。マレーシアの支部承認を含め、新たな組織形成という拡大の方向もあるわけです。

議論が沸いたのは、OECD の調査プロジェクトや人材育成などの外部の委託事業を ICSB として担い、収入も稼ごうという方向をめぐってでした。当然国際事務局として、こうした取り組みを進めたい意欲があり、また韓国は ACSB としてやる気があるわけですが、ICSB がそういう活動に適しているのか、目的に沿うのか、組織体制運営体制などどうするのかなどの疑問や批判も出て、議論百出で、審議未了のかたちとなりました。とりあえずは、情報提供などにつとめるという了解です。これもあって、4時間の長丁場の会議になったわけです。

理事会のはじめには今次大会組織委員長のクーニー氏から経過報告もありましたが、大会構成のみならず、開催の資金面等では相当の苦労もあったようです。スポンサーが容易に集められなかったこと、それもからんで資金繰りに困り、ECSB からの前借りという形をとったことなどでした。大会開催はやはり大変のようです。

私個人にはアイルランドという地自体、かねてからの経済発展・産業発展の重要なモデルとしての研究関心対象でもあり、1999 年以来何度かにわたって訪れております。この間のダブリンの変貌発展ぶりも驚くばかりのものです。2008 年の世界金融危機はアイルランドにバブル崩壊をもたらし、相当の困難に陥ったものの、たくましく再生と発展の道をまた歩み出しており、ダブリンのまちはどこも賑わっており

なお ICSB 支部(associates)として、2014 年にマレーシア支部 International Council of SME & Entrepreneurship Malaysia (ICSMEE Malaysia)が設立され、ACSB に加盟しました。同支部の運営母体は Asia e University (AeU)です。

また SEAANZ (Small Enterprise Association of Australia and NewZealand) も ACSB に加盟いたします。SEAANZ は独自カンファレンスの年次開催、学術誌 Small Enterprise Research の刊行など、活発な活動を行っています。

4. ICSB 便り



4.1 ICSB がより身近に

■ICSB の新しいサイトが開設

ICSB ダブリン大会の開催中に、学会サイトがリニューアルされました。ユーザーフレンドリーなデザインが提唱され、サイトから様々な ICSB 資料にアクセスが可能です。 <http://icsb.org/>

■ICSB のモバイル・アプリが配信

アップル・ストア、アンドロイド・ストアで ICSB のアプリが配信されています。ICSB 関連のニュースやイベントをいち早く獲得することができます。

4.2 国際学会・会議・イベント

■The International Entrepreneurship Forum 7月31日－8月2日 コロンビア・ボゴタ

■Entrepreneurship Conference 2014 9月9－12日 ブルガリア・黒海・ネッセバル

■9th Colloquium on Organizational Change & Development 9月12－13日 ドイツ・エッセン

■XIX Reunion Anual de la Red Pymes Mercosur 9月24－26日 ブラジル・サンパウロ

■5th Annual GW Entrepreneurship Research & Policy Conference

10月16－19日 米・ワシントンDC

■2nd Annual ACSB Asian SME Conference 10月27－31日 韓国・ソウル

■Annual Conference of ICSB China-Mainland 11月3－5日 中国・青島

■2014 International Entrepreneurship and Innovation Forum 11月17日 台湾・台北

■RENT XXVIII Conference 11月19－21日 ルクセンブルク・ヴァルフェルダンジュ

■USASBE 2015 Conference 2015年1月22日－25日 米・フロリダ、タンパ

5. Journal of Small Business Management 52(2) の紹介



同族企業特集号

SPECIAL ISSUE: Family Firms, Entrepreneurship, and Economic Development

同族経営が企業の業績にどのような影響を与えるかについては、プラス面を強調するスチュワード理論 (Stewardship Perspective) とマイナス面を強調するエージェンシー理論 (Agency Perspective) という2つの大きな理論的潮流がある。スチュワード理論では創業家一族が管理者 (Steward) として経営に関わることにより、創業時の理念が深まってゆくと考える。創業家出身の経営者は利他的に行動し、一

族の絆を深め信頼を醸成し、短期的な損得でなく中長期的視点にたって経営を進める。一方、エージェンシー理論は企業を、株主－経営者、経営者－従業員など委任者（プリンシパル）－受託者（エージェント）関係の集合としてとらえ、同族企業は株式集中度と情報非対称性が大きいためエージェンシー費用が膨らむと考える。縁故採用、能力の劣る一族の経営者登用、リスク回避的な前例に囚われる保守的経営などがエージェンシー費用につながる。この他に、環境変化と最適な組織形態に関する「組織形態論」（Configuration Approach）、関係者間の共通理念や絆の強さを評価する「社会的資本形成論」（Socio-emotional Wealth approach）などがある。

■ Family Firms, Entrepreneurship, and Economic Development

Carsrud,A. and M.Gucculeli

特集号編集者による、同族企業と起業家精神について研究の意義並びに今後取り組むべき論点の呈示。

■ Family Firm Heterogeneity and Governance:A Configuration Approach

Nordquist,M., Sharma,P. and F.Chirico

組織形態論(Configuration Approach)にもとづき、同族企業を所有水準（Family involvement in ownership）、経営への関与水準(Family involvement in management)から9類型化し、各類型が抱える利点・欠点について検討。

■ Is the Family an “asset” or “Liability” for Firm Performance ? The Modeling Role of Environmental Dynamism

Chirico,F. and M.Bau

スイス中小企業を対象として、創業者一族が経営陣に占める比率により、同族企業の利点（スチュワード理論）と欠点（エージェンシー理論）の現れ方がどう異なるか、検討した。

■ Sales and Employment Changes in Entrepreneurial Ventures with Family Ownership :Empirical Evidence from High Tech Industries

Colombo,M.G. et al

社会的資本形成論（Socio-emotional Wealth approach）にもとづき、同族経営を通じた関係者間の共通理念や絆の強さに着目し以下の仮説を実証的に検討した

■ Examining the Impact of Inherited Succession Identity on Family Firm Performance

Yoo,S.S.,Schenkel,M.T. and J.Kim

経済活動は認知的、文化的、構造的、政治的な社会的枠組みに埋め込まれたものであるとする埋め込み理論(Social embeddedness)にもとづき、長男承継と非長男承継を比べ、アイデンティティや企業業績への影響について、韓国企業を対象とし研究した。

■ Toward a Theory of Family Capital and Entrepreneurship: Antecedents and Outcomes

Dyer,G.,Nenque,E., and J.Hill

起業家を成功に導く鍵として「ファミリー資本」(family Capital)という概念を提唱。「ファミリー資本」

は、起業家一族が保持する人的資本(human capital)、社会資本(social capital)、財務資本(financial capital)で、その資本蓄積度合いは民族、地域、宗教などに左右される。

■Japanese Women Entrepreneurs: Implications for Family Firm

Welsh,D.,Mmili,E. and M. Ouchi

日本の女性起業家を対象とした質問調査にもとづき、一族のサポート(Family Support)の重要性について理論的・実証的に検討している。

■The Impact of Cultural Openness, Religion, and Nationalism on Entrepreneurial Intensity : Six Prototypical Case of Turkish Family Firms

Sabah,S.,A.Carsrud and A.Kocak

起業家精神(Entrepreneurial intensity)に、地域・民族などの文化がいかに影響を与えるか理論的に検討し、トルコの事例研究によって考察した。

■Owner-Management, Firm Age, and Productivity in Italian Family Firms

Cucculelli, M. et al.

同族企業の業績は一般企業に比べ劣るのか、また創業から企業存続期間が長いほどその傾向は緩和されるのか、イタリア企業を対象とした大規模な実証研究を行った。

■ Ability and Willingness as Sufficiency Conditions for Family Oriented Particularistic Behavior :Implications for Theory and Empirical Studies

Massimo. et al

創業者一族の「能力」(ability)と「意思」(Willingness)という視座を示し、「能力」且つ「意思」が結び付いた場合に限り企業経営への影響が生じるというモデルを提示した。

5. 編集後記



8月26日-27日のサマーワークショップでご講演いただくキム・キチャン ACSB 会長は、日本企業の研究経験も長く、大変気さくなお人柄です。韓国では新学期が始まる忙しい時期ですが、JICSB の友人達のためにということで、要請をご快諾いただきました。(加藤)

6月10日-16日にアイルランド・ダブリンに行ってきました。ICSB ダブリン大会への参加・報告の傍ら、時間を見つけてダブリンを散策し、名所・旧跡を回ったり、美味しい料理に舌鼓を打ちました。各国の歴史・文化に触れられるのも、国際学会の醍醐味です。(山本)